

【情報名】 極早生温州の隔年交互着果法利用技術におけるせん定時期と着果条件								
部門	果樹	専門	栽培	分類	研究	連絡	紀南かんきつセンター	
【実施機関名】 三重県農業技術センター							先	Ⅷ 05979-2-0008
【要約】 極早生温州の隔年交互着果栽培法では、5月せん定で新梢発生本数が多く収量も多い。また、葉果比が小さい程収量が多くなり、夏枝母枝の長さが30cmより60cmの方が果実肥大がよい。 キーワード：極早生温州、隔年交互着果法、せん定時期、夏枝母枝								

【背景・わらい】

極早生温州は、一般的に樹勢が弱い。さらに、早熟栽培を目的とした成熟期の肥料制限により樹勢の維持が難しく、高品質果実の連年安定生産が難しいなどの問題が生じている。そこで、これらに対応し、かつ低コストを目的とした隔年交互着果栽培法の技術確立を図るが、その際の適正なせん定時期、および優良な夏枝母枝の形質を明らかにする。

【情報の内容・特徴】

1. 極早生温州（崎久保早生8年生）の着果準備年におけるせん定時期を収穫直後の10月、3月および5月に行い、比較を行った。5月せん定で夏枝母枝1本当りの長さは短くなるが、発生本数も総伸長量も多く収量も27年平均で最も多くなる。（第1表）隔年交互着果栽培法では、収量が慣行栽培に比べ170%となるが果実の着色は5日程度早まり早期収穫が可能になる。（第2表、第1図）
2. 夏枝母枝の条件を長さで30cm、60cm、角度で水平、斜立に設定し、果実肥大を比較した。長さでは30cmよりも60cmの方が果実の肥大がよく、角度では差がない。（第2図）

【情報活用上の留意点】

5月せん定を行う場合、夏枝母枝の平均伸長量がやや短くなるので着果年での果実肥大を促すために、準備年での樹勢は強めに保つ必要がある。

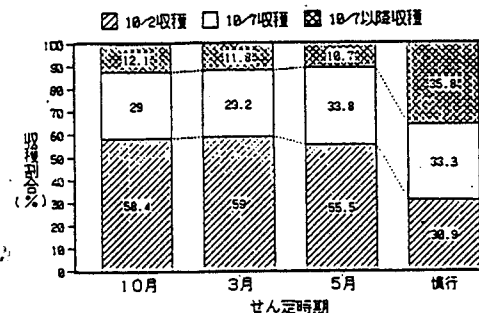
【具体的データ】

第1表 せん定時期別の着果準備年における夏枝伸長量（1樹当たり）

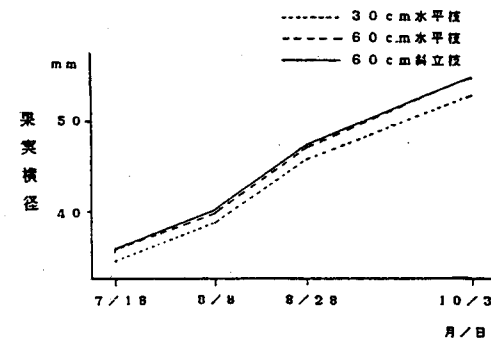
処理区	夏枝数		平均長		総伸長量	
	平成1年	平成2年	平成1年	平成2年	平成1年	平成2年
10月	—	71.7	—	38.4cm	—	2739.2cm
3月	43.8	72.7	34.7cm	35.4	1519.9cm	2555.5
5月	82.5	125.8	31.5	26.2	2598.8	3213.8
慣行	18.5	0	32.8	0	606.8	0

第2表 せん定時期別の着果年における1樹当たり収量（H2・H3）

処理区	収量(kg)		果数		平均重(kg)	
	平成2年	平成3年	平成2年	平成3年	平成2年	平成3年
10月	—	21.0	—	283	—	74.2
3月	13.6	24.0	210	324	64.7	74.1
5月	19.9	22.5	325	285	61.5	78.9
慣行	12.2	13.0	157	122	78.3	106.6



第1図 せん定時期別の収穫量割合



【その他特記事項】

研究課題名：隔年交互着果法利用技術の確立  
 研究期間：平成元年～5年 予算区分：緊急技術開発  
 研究担当者：市ノ木山 浩道、小林 昇、大野 秀一